



## 六 編集会議にて

---

「みんな、どう。いいアイデアは出来た？」

沈黙だ。会議は眠っている。その中で、スースーと寝息が聞こえてきた。本当に、眠っている人がいる。坂本だった。

「坂本。坂本」先輩の鈴木が左ひじで坂本の右わき腹をつつく。はっと目を覚ます坂本。昨晩は、ひと晩中、夢の中でも、婚活イベントのアイデアを考えていたので、熟睡できず、睡眠不足となり、肝心の会議でつい眠ってしまったのだった。

「編集長！」

坂本が手を上げた。静寂の中で、眠っていたはずの坂本が大きな声を出したものだから、周りのみんなが驚いた。

「何？まさか、トイレに行きたいって言うんじゃないでしょうね。昔、先生がこれわかる人って、私たち生徒に聞いたら、クラスのある男子が手を上げて、先生がその子を指名したら、「わかりません」って答えたんだけど、まさか、同じ手じゃないでしょうね」

編集長の体はタヌキだが顔はキツネだ。目尻だけが上がっている。そしてその目は下弦の月だ。また、その月も怒り心頭の新月に近づこうとしている。編集会議が始まって一時間が過ぎようとしているのにも関わらず、誰からも優れた提案がないからだ。

「この場の雰囲気を変えたい気持ちはわかるけれど、つまらないジョークはよしてよ」

編集長が前歯で唇を噛んでいる。イライラしている証拠だ。いや、イライラを抑えるために、唇を噛んでいるのだ。

「いえ。婚活プロジェクトのアイデアです。婚活イベントを開催して、ただ単に、集まってくださいでは、人は集まらないと思います」

「わかっているよ。それだから、みんなこうして、悩んでいるんじゃないか」

先輩の鈴木がボソッと呟く。

「それで、何か、人が集まるいいアイデアでもあるの？」

編集長の声は固い。つまらないアイデアならその固い地面から怒りのマグマが吹き出しそうだ。

「はい。愛のキューピット作戦です」

「愛のキューピット作戦？」

宮本以外の全員が、マヨネーズの器を咥えたかのように口をあんぐりと開けた。

「面白そうね。詳しく聞かせて」

口をすぼめた編集長の声が少し柔らかくなった。だが、まだ、豆腐の前のふかした大豆の固さだ。

「はい。婚活プロジェクトの参加者に番号つけて、宝くじのように愛のキューピットがルーレットに矢を放ち、その番号同士の人をカップルにするんです」

「それって、偶然だろ。気にいらぬ人同士がカップルになったどうするんだよ」

鈴木先輩がマヨネーズを吐き出したかのように突っ込んでくる。

「気に入る、気に入らないって、第一印象でしょう。話をしてみれば、意外に気が合うことがあるし、それに、このカップルは十五分制限で、再び、愛のキューピットが、ルーレットに矢を放ち、新たなカップルの組み合わせを作ります。三回もすれば、いいと思います。最後に、気に入った人の番号を指名して、同じであったら、付き合ってもらうんです」

「面白いアイデアだけど、最後は普通の落ちだな。どこにでもあるアイデアだ」

鈴木がもう一度マヨネーズを啜えたかのように目を瞑った。

「基本的には、一般の婚活と同じね。そこに、愛のキューピットを持ちこんだのが、若干の新しさかな」

編集長が冷静に分析する。

「問題は、誰がキューピットをするかね。普通の人じゃ面白くないわ」

「的に矢を打つんだろ。素人だと当たらないぞ。はずれたら、それこそ、このアイデアもはずれるぞ」大きく目を見開いた鈴木がちやかす。

「その点は大丈夫です。矢を射るのは弓道の有段者です。それに、愛のキューピットの衣装は、武士の姿にしてもらいます」

「武士？」

編集長、鈴木、それ以外の編集員がなんで？という顔でよだれを垂らすぐらい大きな口を開けた。

「普通の愛のキューピットの姿じゃインパクトがありません。それにここは日本です。キューピットではなく武士が恋人たちのために矢を射るんです」

「そりゃあ、弓道をやっている人はきちんとした身なりをしているけれど、婚活プロジェクトで武士のかっこうはさすがに似合わないんじゃないか。雰囲気をぶち壊すぞ。痛い」

鈴木は首をひねりすぎたのか、小さく叫んだ。

「似合わないからやってみる価値があると思います。普通のことをやっていたんでは誰も来てくれないじゃないですか」

坂本は自分で説明しながらも、心の奥底では、本当に大丈夫かなあ、と不安になる。だけど、不安だからこそ、自分を鼓舞するために、声がクレッセントしていく。

「坂本君。本当に大丈夫？」

編集長が疑いの眼で坂本の顔を見る。視線が痛い。目と目が合った。ここで視線をはずした方が負けだ。坂本も負けじと編集長の目を真剣な眼差しで見返す。

「わかったわ。やってみたら」編集長の目が下弦の月殻上弦の月が変わった。

「編集長。本当にいいんですか」鈴木は右と左の眉毛が段違い平行棒になる。鈴木は驚くといつもこんな顔になるのだった。

「この会社の運命がかかっているのよ。悩んでいるよりも、やってみましょう。坂本君。あなたがこの婚活プロジェクトのリーダーよ。みんな、彼に協力してよ。よろしく」編集長は立ち上がると、背中を見せて、自分の机に戻った。

「はい」宮本は嬉しさのあまり、声が裏返ると同時に、「い」の語尾が事務所の天井にまで届くほど上ずった。

「ほんとうに大丈夫かなあ」

坂本は缶ビールの蓋を開けた。編集会議では薄い胸板をどんと叩いたものの、強く叩き過ぎたのか、今ではその胸が不安で痛い。

「何が？でござるか」

宮本が台所のキッチンから振り向く。髪が、明治は遠くになりけり、かのように、ざんばら、ざんばらと揺れた。

「プッ。宮本さん、それ何？」

宮本はどこで見つけてきたのか、ピンク色のエプロンをしていた。その姿が妙に可愛らしかった。

「これでござるか。料理を作るのに汚れないように付けているのでござる。まあ、鎧のようなものでござる」

「宮本さん。似合うよ」

「似合うでござるか」

宮本がぼさぼさの髪の毛を搔いている。武士なりに照れているのだ。

「それよりも、坂本殿は何が心配なのでござるか」

「婚活プロジェクトだよ。編集長をはじめ、みんなの前で大見えをきったけれど、本当に成功するのかなあ」

「編集長も言っていたように、やってみなければわからないでござる」この日も、宮本は石になったまま、坂本のポケットの中で、編集会議の内容を聴いていたのだった。

「まあ、そうだけど。心配し過ぎても仕方がないか。でも、そのピンクのエプロンは本当に似合っているよ」

「これでござるか」宮本は両手でエプロンを持って揺らす。白旗じゃない。ピンク旗だ。これなら婚活プロジェクトは成功するだろう。いや、して欲しい。しなければ困る。

「それよりも、料理が出来たでござる。さあ、一緒に食べるでござる」

「いい匂いだね」

食卓の前には、刺身とやきとりが見事に並んでいた。

「宮本さんがこれを料理したの？」坂本は宮本の料理の手際よさに驚く。

「刀と矢を使うのは得意でござる」

「刀と矢？」宮本の家には包丁はない。夕食はこれまで外食かコンビニの弁当を買うぐらいで、家で調理することはほとんどないためだ。くだものナイフぐらいなら、台所の隅っこにあるはずだ。刺身の切り口を見る。鋭い切り口だ。包丁はないため、宮本が腰に差した刀を使ったのだろう。また、やきとりの串は宮本の体に刺さった矢の一部が使われていた。

「へえ、すごい。生活能力が高いなあ」

宮本は戦国時代の人。自分は現代人。現代の方が戦国時代よりも文明や文化、情報、知識の点で進んでいると思っていたが、「生きる力」という点では、戦国時代の人の方が現代人よりも数段勝っているんじゃないか。宮本はそう確信した。

